

原罪について

1. カルバンの抄約 (キリスト教綱要Ⅱ p24~)

- 1) 「原罪」とは我々の本性の遺伝的な歪曲また腐敗であって、魂の全ての部分に拡がっている。
- 2) これは第一に我々を神の怒りにあたるものとし、次に我々のうちに、聖書が「肉の行い」(ガラ5:19)と呼ぶ行いをもたらすのである。
- 3) この理由によって「罪の実」と呼んでいるが(ガラ5:19~21)聖書の多くの箇所とともに、これらはパウロによって「罪」と呼ばれているものである。
- 4) 次に第二の点がある。それはこの歪曲が我々のうちで決して止むことなく、たえず新しい実を生み出しているということである。
- 5) というのは我々の本性は単に善を欠き、善にむなしいというだけでなく、実に一切の悪には富み、実り多く、これは活動しないではおれないからである。
- 6) 人間のうちにあるものは「知性」から「意志」にいたるまで、「たましい」から「肉」にいたるまで全てが汚されているのである。
- 7) (ここから「基督教全史」ケアンズ)カルバンは、救いは人間の功績や神の予知とは関係のない「絶対的な選び」の事柄であることを教えた。選びは神の絶対意志にもとづくものであり、或るものは救いに、他のものは滅びに予定されている。
- 8) カルバンはまた、十字架の上のキリストの御業は救いに選ばれた人々に限ると信じた。この信仰は「限定贖罪」の教義である。
- 9) これと必然的に関連しているのが「不可抗の恵み」の教義である。選ばれた者は聖霊が不可抗的にキリストに引きつけるから、自分自身の願いとは関係なく救われるであろう。
- 10) 「聖徒の耐久」がカルバンの体系の最後の重要な点である。聖霊の業によって不可抗的に救われたところの、これら選ばれた人々は決して最終的に滅びることはないであろう。

2. 「われらの信仰箇条」抄約 (オランダメノナイト コルネリス・リス 1747年)

- 1) アダムとエバは悪魔またはサタンと呼ばれるあの蛇の狡猾なまどわしに身をゆだねてしまった。我々の先祖は、その良心に逆らい、はっきりした神の戒めを破って、神によって食べるのを禁じられていた木の実を食べてしまった。
- 2) この一つの不従順によって、罪はその全ての悲しむべき結果とともに世に入ってきた。我々は全ての関係において、これがもたらす広範囲の影響を認めるのである。そればかりか、彼らは聖く義しい創り主の怒りと厳しい取り扱いとを受けるようになった。これらのあらゆる苦しみとみじめさとが、彼らの全ての子孫に、生まれながらに遺伝されたものとして伝えられるようになった。(Iコリ15:21~22)
- 3) それであるから我々は彼らとその全ての子孫が完全な死、つまり肉体の死、霊的な死、そして永遠の死を受けねばならなくなったことを信じる。人は自分自身の努力によっては、

アナバプテストのクリスチャンとは何か?⑥—2

絶対に死から自分を救い出すことができないし（ローマ 3:23）またどんな被造物も人を救うことができない。（詩 49:7~8）

- 4) もし神があわれみによって人のところに来て下さらなかったなら、人はこの悲惨な状態にとどまっていなければならなかったであろう。（エゼ 16:5~6）
- 5) 人が墮落した後に、神はご自分の恵み深いご意向を人に啓示された。彼は女の末である贖い主を送ると約束されたのである。これは後に続く全ての約束の基礎である。
- 6) そしてこの回復への希望は、最初の先祖に対してだけでなく、彼ら全ての子孫に対しても与えられたのであって、人々が自分の罪深いことと神の恵みを拒むことによって、神から自分自身を切り離してしまわない限り、彼らもこの希望にあずかることができるのである。
- 7) 人の自由意志について、我々は次のように信じる。すなわち墮罪によって人にもたらされた損失と荒廃とがどんなに大きなものであろうと、神の恵みによって人の理性と良心の光はまだ全く消え失せてしまわなかった。聖書（ローマ 1:19~21）と我々の経験はともにこのことを教えている。さらに、人はまた自由に行動する者としての立場に続けて置かれているので、彼は神の御子イエス・キリストにおいて、神が提供しておられる導きと祝福とを受け入れるか、それとも拒むかすることができる。（申命 11:26~28）この自由は理性的存在者の特質としてなくてはならないものである。
- 8) この理由から我々は次のことを認めるのである。すなわち我々は神の先行的恩恵なしには我々の腐敗した性質が善を追い求め、善をえらび、善について理解することは全く不可能であると。

3. 原罪についての比較

	カルバン	アナバプテスト	○との関連
全き罪人	○	△	信仰義認 予定説
罪の遺伝	○	△	嬰兒洗礼
神の恵み	○	○	
自由意志	×	○	新生

4. 参考（アナバプティズムの神学 ロバート・フリードマン p121）

あらゆる神学の核心をなしていた「救済論」は、アナバプテスト派の思想では主要な主題となっていなかった。ルターの言葉でいえば「恩寵の神を見出すにはどうしたらよいか」などと言ったことは、アナバプテスト達にとっては決して大きな関心事ではなかったのである。アナバプテスト達は、自分達がみちに迷い、途方に暮れている罪人であるという打ちひしがれた自覚を出発点としてはいなかった。むしろ、再生（新生）、ないし精神的な生まれ変わりという輝かしい経験を出発点としていたのであった。